



各報告の概要（報告順）

基調講演

クラウディア・デリクス

「日本の1968年とムスリム世界の1968年：ヨーロッパからの視点」

世界の特定の地域にとって1968年という年は特別な意味を持っているが、それ以外の地域にとっては大した意味合いを持たないかもしれない。ヨーロッパの論者は「グローバルな1960年代」が存在したかのように見がちだが、視点を変えてみれば、全く異なった光景が見えてくるだろう。確かに、1968年とそれに付随する時期はグローバルな変容の時代と捉えられる。だが、それぞれの地域においては、(暴力的)行動のイデオロギイ的補強や正当化を伴う特有の形が見られたことに留意すべきである。また、中東における日本赤軍のプレゼンスやムスリム同胞団の越境的な活動などに見られるように、特定の地域を越える相互作用も重要な点である。この講演では、日本とインドネシアを事例として取り上げることにより、地域間の相関性と「グローバルな1960年代」の多様性に迫っていききたい。

小熊英二

「『1968』とは何であったのか、何であるのか：グローバルな観点から見た日本の経験」

「1968」の運動は、当時の社会を世界全体にわたるレベルで根本的に変えたのだろうか。この報告では、日本現代史の観点から「1968」について検証する。日本の「1968」においても、当時の社会的背景、ビジュアル・メディアの発展や近代化の進展といった他の国々と同様の要素が見られたのであり、この報告においても、そうした共通の背景や特徴といった観点から日本の「1968」に焦点を当てていく。だが、今日において「1968」と総称される世界各地の経験は実に多様であり、相互に関連しているように見えている現象も実際のところは関係がなかった場合が多い。ここでは、当時の世界において「1968」を引き起こす基盤となった共通の要素と各地域における個別の要素を切り分けつつ、日本における「1968」の意味について改めて考えてみたい。

個別報告

加藤久子「ポーランド「三月事件」を結ぶ点と線：ワルシャワ、バチカン、エルサレム」

ポーランドの1968年には2つの側面がある。1つは当局による演劇の検閲に端を発する学生運動（三月事件）であり、もう1つは国内に吹き荒れた反ユダヤ主義の嵐である。後者は前年の第三次中東戦争を受けて始まった「反シオニスト運動」の体裁を取っていたが、内実は、戦前からの古参の共産党員と、戦後入党した若い党員との権力闘争であったと言われている。しかしプロパガンダが過熱する中で排斥の動きは党内に留まらず、一般のユダヤ系市民にまで波及し、ホロコーストを生き延び、なお「祖国」ポーランドに留まり続けていたユダヤ系市民の6~7割が国を離れることとなった。これを受けてポーランドのカトリック教会の長たるヴィシンスキ首座大司教は、「人種差別」を抑止することができなかったことに対する自らの責任を口にする。

報告では政教関係、宗教間関係の視点から、このユダヤ系市民の一時的な顕在化と不在がポーランドに何を残したかについて考えてみたい。

井関正久「1968年から半世紀を経て：ドイツの場合」

ドイツでは1968年への関心が非常に高い。その背景には、西ドイツで学生運動を担った戦後第一世代が、「ヒトラー・ユーゲント世代」に当たる親世代に対して反旗を翻したという、ドイツ特有の事情がある。また、運動を担った「68年世代」がその後「新しい社会運動」を経て緑の党結成の中心に立ったというポジティブな側面も、関心の高さの背景としてあげられる。さらに、運動から派生した赤軍派RAFなどによる極左テロリズムが70年代の西ドイツを震撼させた記憶が今でも薄れていないという事実もある。一方、「プラハの春」に影響を受けた東ドイツの同世代の動向についても、近年盛んに議論されるようになった。本報告では、東西ドイツの1968年、およびその評価をめぐる長年の論争を振り返るとともに、68年イメージがこの半世紀の間にいかに形づくられ、ドイツ社会に影響を与えてきたのかを検証する。

松井康浩「ソ連・西欧知識人の越境的連帯とその意義：起点としての1968年」

プラハの春とそれを制圧したワルシャワ条約機構軍による軍事介入は、東側陣営における1968年を象徴する事件だが、その介入に対して、同年8月25日にモスクワの赤の広場で抗議のデモンストレーションを敢行したソ連の異論派知識人について語られることは少ない。また、その異論派を支援した西側の知識人に注目が集まることはさらに稀である。本報告では、抗議デモ参加者の一人であるパーヴェル・リトヴィノフ (Pavel Litvinov 1940-) と、彼の支援要請に応えたオランダ人特派員・学者カレル・レーヴ (Karel van het Reve 1921-99)、イギリスの著名な詩人スティーヴン・スペンダー (Stephen Spender 1909-95) の二人と彼らの支援プロジェクト——「ゲルツェン財団」、「作家学者インターナショナル (WSI)」及びその人権情報誌 *Index on Censorship*——に光を当て、言論の自由を核とし

た人権規範・実践がグローバルに展開される重要な契機が、1968年を起点とするソ連と西欧の知識人の越境的連帯にあったという仮説を提示する。

真島一郎「セネガルの1968年5月」

独立から8年をへた1968年5月末から6月初旬にかけて、セネガルの首都ダカールでは、フランス国内の叛乱に連鎖するかたちで学生の抗議行動を端緒とする都市暴動にちかい騒乱状態が継続し、センゴール政権期20年間で最大の政治危機をもたらした。

ダカールの「五月」における主たる争点は、労働者にとっては雇用と資本の、学生にとっては大学運営とカリキュラム編成の、いずれも「国民化／セネガリザシオン」をめぐるものだった。脱植民地期のパン・アフリカニズムが冷戦体制に包囲されて退潮を余儀なくされるまで糾弾してきた「未完の独立」は、独立後西アフリカの「1968」にいかなる理念として継承されたのか。セネガル「五月革命」の背景にせまるこの問いは、旧宗主国・植民地間の単純な——たとえば模倣をふまえた——二者関係という以上に、共和政体そのものをめぐる翻訳論的な再考の契機を促さずにいないだろう。

山本薫「レバノン小説が描いたアラブ諸国の1968年」

本発表では、1972年にタウフィーク・ユースフ・アッワードが発表した小説『ベイルートの碾き臼』を通じて、レバノンを中心にアラブ諸国の1968年を振り返る。この小説の主人公は1968年に首都ベイルートの大学に進学し、当時最高潮にあった学生運動に身を投じる。レバノンの学生運動の論点の一つはパレスチナ問題だった。この前年の第三次中東戦争でアラブ諸国が大敗を喫したのを機に、パレスチナ難民たちが自ら祖国解放を目指す武装闘争に立ち上がり、多くの難民を受け入れていたレバノンはその拠点になっていく。イスラエルからの報復攻撃によるレバノン市民の被害も増加する中、パレスチナ問題へのコミットメントをめぐって国内の世論は分裂する。この分裂は同時に、建国以来、キリスト教徒とイスラーム教徒との間でくすぶっていた政治的、社会経済的な対立と連動していた。この小説にはレバノン社会が内戦の勃発へと亀裂を深めていく過程が、1968年の学生運動の展開と、その中で生じた男女のドラマを通じて生き生きと描かれている。

小倉英敬「ラテンアメリカ1968年：「中間層」主体の変革運動」

ラテンアメリカでは、周辺部資本主義社会として資本主義的發展は遅れ、そのため「中間層」の成長も1960年代に漸く本格化した。これら「中間層」は主に、寡頭政制支配の下で産業資本家層等と連携して寡頭政制支配の打倒を目指したが、特に政治面においては、寡頭制を支援する保守派軍部の姿勢もあり、政治的民主化の推進には大きな障害に直面した。

このような状況下で、ラテンアメリカ諸国においても1968年前後に寡頭政制支配の打倒を目指すとともに、政治的民主化を達成しようとする種々の運動が生じた。これらの「中間層」主体の運動は、各国の個別事情を背景として、以下の5つの類型に分類できる現象を

生じさせた。①比較的日米欧先進諸国の1968年現象と類似したメキシコ、②「中間層」の脆弱性のために革新派軍部によるクーデターが生じたペルーとパナマ、③「中間層」を主体とする中道政治勢力の左右分裂と、左派勢力との連携から社会主義政権を生じさせたチリ、④軍事独裁制下でゲリラ運動を発生させたブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、⑤社会主義体制下で民主化運動の兆しが見られたキューバ、の5類型である。

登壇者略歴（50音順）

井関 正久（いぜき ただひさ）

中央大学法学部教授。ベルリン自由大学にて博士号（PhD）（政治学）取得。東京大学DESK（ドイツ・ヨーロッパ研究センター）助手等を経て、現職。専門はドイツ現代史。主要業績として、『ドイツを変えた68年運動』（白水社、2005年）、『戦後ドイツの抗議運動：「成熟した市民社会」への模索』（岩波書店、2016年）、「ドイツの『1968年』を振り返る：50年後の視点からこの時代をどう捉えるか」『思想』1129号、2018年ほか。

梅崎 透（うめざき とおる）

フェリス女学院大学文学部教授。一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学、コロンビア大学大学院歴史学科博士課程修了。Ph.D.（アメリカ史）。東京大学アメリカ太平洋地域研究センター研究員を経て、現職。主要業績として、『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」：世界が揺れた転換点』（西田慎との共編著、ミネルヴァ書房、2015年）、「『1968年』のアメリカ例外主義：大西洋をまたいだベトナム反戦運動」『思想』1129号、2018年、「新左翼とサルトル／ニューレフトとカミュ：日米の『1960年代』と実存主義」『社会文学』45号、2017年、ほか。

小熊 英二（おぐま えいじ）

慶応義塾大学総合政策学部教授。1962年生まれ。東京大学農学部卒業、出版社勤務を経て、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。主要著作として、『単一民族神話の起源：〈日本人〉の自画像の系譜』（新曜社、1995年）、『〈日本人〉の境界：沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』（新曜社、1998年）、『〈民主〉と〈愛国〉：戦後日本のナショナリズムと公共性』（新曜社、2002年）、『1968』（全2巻、新曜社、2009年）、『社会を変えるには』（講談社現代新書、2012年）、『生きて帰ってきた男：ある日本兵の戦争と戦後』（岩波新書、2015年）ほか。

小倉 英敬（おぐら ひでたか）

神奈川大学外国語学部教授。青山学院大学大学院博士課程中退。1986年外務省入省。中南米局、在キューバ、在ペルー、在メキシコ大使館勤務を歴任して1998年退官。2010年より現職。主要著書として、『ラテンアメリカ1968年論』（新泉社、2015年）、『メキシコ時

代のトロツキー：1937-1940』(新泉社、2007年)、『マリアテギとアヤ・デ・ラ・トーレ：1920年代ペルー社会思想史試論』(新泉社、2012年)、『「植民地主義論」再考：グローバルヒストリーとしての「植民地主義批判」に向けて』(揺籃社、2017年)、『マーカス・ガーヴェイの反「植民地主義」思想：パンアフリカニズムとラスタファリズムへの影響』(揺籃社、2017年)、『グローバル・サウスにおける「変革主体」像：「21世紀型」社会運動の可能性』(揺籃社、2018年)ほか。

加藤 久子 (かとう ひさこ)

國學院大學研究開発推進機構客員研究員。1975年生まれ。一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。専門は歴史社会学、宗教社会学、東欧現代史。主要著書として、『教皇ヨハネ・パウロ2世のことば：1979年、初めての祖国巡礼』(単著、東洋書店、2014年)、「社会主義政権下での宗教実践：スターリン期ポーランドの新興工業都市の暮らし」(中野智世・前田更子・渡邊千秋・尾崎修治編『近代ヨーロッパとキリスト教：カトリシズムの社会史』勁草書房、2016年)ほか。

後藤 絵美 (ごとう えみ)

東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク特任准教授・東京大学東洋文化研究所准教授(兼務)。東京外国語大学卒、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。博士(学術)。専門は現代イスラーム研究、アジア比較文化史、服飾文化史。カイロ・アメリカ大学研究員、日本学術振興会特別研究員、東京大学東洋文化研究所助教を経て、2015年より現職。主要業績として、『神のためにまとうヴェール：現代エジプトの女性とイスラーム』(単著、中央公論新社、2014年)、『イスラームのおしえ(シリーズ1・イスラームってなに?)』(単著、長沢栄治監修、かもがわ出版、2017年)、アジア法学会編『現代のイスラーム法』(共著、成文堂、2016年)、松山洋平編『クルアーン入門』(共著、作品社、2015年)ほか。

酒井 啓子 (さかい けいこ)

千葉大学大学院社会科学研究院教授。東京大学教養学科卒、英ダラム大学中東・イスラーム研究センター(CMEIS)にて修士号取得。専門は中東現代政治(特にイラク)。アジア経済研究所、在イラク日本大使館、東京外国語大学等を経て、2012年より現職。主要単著として、『イラクとアメリカ』(岩波新書、2002年)、『フセイン・イラク政権の支配構造』(岩波書店、2003年)、『イラク：戦争と占領』(岩波新書、2004年)、『<中東>の考え方』(講談社現代新書、2010年)、『移ろう中東、変わる日本：2012-2015』(みすず書房、2016年)、『9.11後の世界史』(講談社新書、2018年)、編著として、『中東政治学』(有斐閣、2012年)、『途上国における軍・政治権力・市民社会』(晃洋書房、2016年)ほか。

クラウディア・デリクス (Claudia Derichs)

ベルリン・フンボルト大学 (ドイツ) 人文社会科学部教授。ボン大学、ベルリン自由大学、デュースブルク＝エッセン大学にて日本学・アラブ学・社会科学を学ぶ。東京外国語大学およびカイロ大学に留学。ベルリン自由大学にて博士号 (PhD) (日本学) 取得。ヒルデスハイム大学、マールブルク大学等を経て現職。主たる関心は、中東および東南アジアの政治・日本政治・イスラーム研究・ジェンダー研究など。最近の業績として、*Knowledge Production, Area Studies and Global Cooperation* (Routledge, 2017)(単著)、*Women's Movements and Countermovements: The Quest for Gender Equality in Southeast Asia and the Middle East* (Cambridge Scholars Publishing, 2014)(編著)、“The Global Sixties in Southeast Asia,” in: Chen Jian, et al. (eds.), *The Routledge Handbook of the Global Sixties: Between Protest and Nation-Building* (Routledge, 2018) ほか。

中井 杏奈 (なかい あんな)

中央ヨーロッパ大学 (Central European University, Budapest) 歴史学部博士課程 (後期) 在籍。1985 年生まれ。専門は中東欧現代史、特に冷戦期チェコ (スロヴァキア) とポーランドの高等教育史および知識人の歴史。主要業績として「『正常化』時代再考: ポスト社会主義時代の研究者によるカレル大学哲学部史の編纂を中心に」『東欧史研究』40 号、2018 年、「地下大学: 社会主義時代チェコスロヴァキアにおける哲学」(西山雄二編『人文学と制度』未来社、2013 年) ほか。

福田 宏 (ふくだ ひろし)

成城大学法学部准教授。1971 年生まれ。北海道大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学。博士 (法学)。同法学研究科、同スラブ研究センター、在スロヴァキア大使館、京都大学地域研究統合情報センター、愛知教育大学等を経て現職。専門は、国際関係論、中央ヨーロッパ地域研究。主要業績として、『身体の国民化: 多極化するチェコ社会と体操運動』(北海道大学出版会、2006 年)、「チェコスロヴァキア: プラハの春」(西田慎・梅崎透編『グローバル・ヒストリーとしての「1968 年」: 世界が揺れた転換点』ミネルヴァ書房、2015 年)、「現代スロヴァキアにおける歴史論争: 第二次世界大戦期の位置づけをめぐる」(橋本伸也編『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題: ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤』ミネルヴァ書房、2017 年) ほか。

藤澤 潤 (ふじさわ じゅん)

神戸大学大学院人文学研究科特命講師。1982 年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学。博士 (文学)。早稲田大学ロシア研究所招聘研究員、国際医療福祉大学非常勤講師などを経て現職。専門は、ソ連・東欧関係史、コメコン史など。主要業績として、「東西冷戦下の経済関係: ソ連・コメコンと西欧」(浅岡善治・池田嘉郎・宇山智

彦・中嶋毅・松井康浩・松戸清裕編『ロシア革命とソ連の世紀・第3巻（冷戦と平和共存）』岩波書店、2017年）、「1970年代におけるソ連の対東欧政策：コメコン内経済関係を中心に」『ロシア史研究』95号、2014年、ほか。

山本 薫（やまもと かおる）

東京外国語大学非常勤講師。専門はアラブ文学・文化。主要な論文に、“The Burden of Memory: Writing Memories of War in Postwar Lebanon,” in Hidemitsu Kuroki (ed.), *Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 2* (ILCAA Tokyo University of Foreign Studies, 2018), “Writing the Civil War: Lebanese Writers’ Perspectives on a Precarious Coexistence,” in Hidemitsu Kuroki (ed.), *Human Mobility and Multiethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies 1* (ILCAA Tokyo University of Foreign Studies, 2015)、ほか。

真島 一郎（まじま いちろう）

東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授。東京大学大学院総合文化研究科博士過程単位取得退学。専門は、文化人類学、西アフリカ民族誌。「力の翻訳：人類学と初期社会主義」（渡辺公三ほか編『異貌の同時代：人類・学・の外へ』以文社、2017年）、『二〇世紀（アフリカ）の個体形成：南北アメリカ・カリブ・アフリカからの問い』（編著、平凡社、2011年）、『だれが世界を翻訳するのか：アジア・アフリカの未来から』（編著、人文書院、2005年）、『文化解体の想像力：シュルレアリスムと人類学的思考の近代』（共編著、人文書院、2000年）ほか。

松井 康浩（まつい やすひろ）

九州大学大学院比較社会文化研究院教授。1960年生まれ。九州大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（法学）。香川大学法学部を経て、現職。専門は、ソ連政治社会史、国際関係論。関連業績として、『ロシア革命とソ連の世紀・第2巻（スターリニズムという文明）』（岩波書店、2017年、共編著）、『スターリニズムの経験：市民の手紙・日記・回想録から』（岩波書店、2014年）、『グローバル秩序という視点：規範・歴史・地域』（法律文化社、2010年、編著）、「ブレジネフ体制下の知識人と市民」岡本宏編『「1968年」時代転換の起点』（法律文化社、1995年）、“*Obshchestvennost’ across Borders: Soviet Dissidents as a Hub of Transnational Agency*,” in Yasuhiro Matsui (ed.), *Obshchestvennost’ and Civic Agency in Late Imperial and Soviet Russia* (Palgrave Macmillan, 2015) ほか。